

## 平成 27 年度 第 1 回環境計画策定部会 議事録

1. 開催日時：平成 27 年 8 月 3 日（月）14:00～16:00
2. 開催場所：やまと会議室 大会議室
3. 出席者：
  - ・環境計画策定部会専門委員：10 名  
久部会長、井原委員、阪元委員、中澤委員、花田委員、藤井委員、楠下委員、  
佐藤委員、遊津委員、吉田委員
  - ・事務局：7 名  
(奈良県くらし創造部景観環境局 環境政策課、廃棄物対策課、景観・自然環境課)
4. 傍聴者等：1 名（奈良新聞記者）
5. 議題：次期「奈良県環境総合計画」の策定について
6. 配付資料：資料 1 次期「奈良県環境総合計画」策定検討資料（案）  
資料 2 現計画の進捗状況  
(参考資料)
  - 参考資料 1 環境計画策定部会設置規程
  - 参考資料 2 次期奈良県環境総合計画の策定について（諮問）（写）
  - 参考資料 3 新奈良県環境総合計画（改訂版）
7. 議事概要：

事務局より、次期「奈良県環境総合計画」の策定にかかる現段階の検討事項、及び現計画の進捗状況について説明がなされた後、審議が行われた。主な質疑については以下のとおり。

○ 質疑概要

久部会長：事務局より説明のあった資料 1 に基づいて議事を進めます。

資料 1 の 1, 2 について意見はありませんか。(意見なし)

次に、資料 1 の 3 (1) について。計画の期間が 5 年となっています。ご意見はございませんか。(意見なし)。特にご意見が無いようですので、原則 5 年で計画を組み立てていくということで、事務局で作業を進めてください。

資料 1 の 3 (2) の基本理念についての議論に入りますが、この件が気になるとか、こういったキーワードが欲しいなど、ございませんか。

久部会長：「きれいな」は知事がすでに使い始めている単語なのでしょうか。

柘田次長：「きれい」というのは極めて概念的な言葉で、これを浸透させるのは非常に難しい。

世界遺産、国宝、歴史・文化資源などについて、より魅力を高めていくというのが観光交流の面。もう一つ知事がおっしゃるのは、街全体だけでなく、ちょっと一步入っていったところまできれいにすることで、「奈良県はちょっと違うな」というところに持って行きたいということです。それを具体化するのに現在取り組んでいるところです。例えば、弱みである大和川を回復したいであるとか、不法投棄は解消しつつあるが更にゴミをなくしていこうということが挙げられます。さらに奈良を磨くための景観保全なども含め、汚いものを排除していくとか、美しいものをしっかり伸ばすということを進めたいと考えています。

「きれいに暮らす奈良県スタイル」という独自性を出していきたいという願望がありますが、この願望はリアリティーを高めていかないと県民には通じません。どういうことをしていくのかということ掲げていきたい。

久部会長：「きれい」という意味合いの言葉はいくつもあります。「きれい」というのを知事がこだわっているのであれば「きれい」が良いと思います。大宮通の景観整備（平城京 1300 年祭関連）において、住民とのワークショップを通じて街づくりビジョンを作成しました。その中では「うるわしい」という言葉を使っています。奈良であれば「うるわしい」という表現が適しているのではないのでしょうか。「うるわしい」は品格、端正の意味が入ってきます。単なる「きれい」とは意味が違います。「きれい」という言葉が良いのか、「うるわしい」という言葉が良いのか、他に同じようなニュアンスの言葉が良いのか、検討の余地があれば検討するのも一考かと思います。せっかく奈良なので奈良に由緒あるキーワードがあるのではと思います。

梶田次長：しっかり考えていきたいと思います。「きれい」というのはどちらかというと、視覚的な面が重視されているように思います。「きれい」の当て字で「希麗」というのもあります。「きれいな奈良県」とは何なのかをしっかり気持ちを込めていかなければいけないと考えています。

久部会長：三重は「御食国（みけつくに）」。「美し（うまし）国、三重」というのがキャッチフレーズにあり、PRに使われています。奈良県でも特徴のある言い回しを考えていただければ良いと考えます。

佐藤委員：基本理念では「県民がどう思うか」が中心になっていますが、国際性も含めた観光客を念頭に置いた視点をこれから組み入れてはどうかと思います。理念の中に県を外側からみることのできるような視点を入れてはどうでしょうか。

久部会長：ここの「訪れたい」は県外の人々の訪れたいも入っていると思いますが、説明文が誤解を招いているように思います。

梶田次長：もう少し練ってみます。

佐藤委員：文面を読むと「県民が」が強く出ているので、県民の中だけの話かと思いました。

久部会長：文言の修正をお願いします。

井原委員：「きれいな奈良県」というキーワードをどの程度の強みをもって計画の中に盛り込むのかが気になるところです。環境計画でも全面的に「きれいな奈良県」に固有名詞のようにこだわるのか、あるいは基本理念として「きれいな奈良県」の要素を入れて、品格とか奈良県の固有性などを当てはめた独特の表現とするのか。そして、そのなかの一解釈として「きれいな」という要素を落とし込むと、また違ってくるのではないかと思います。「きれいな」を全面的に出す必要があるなら、この言葉が軸となります。この言葉にはクリーンというゴミの問題を含めた意味合いもあるし、美観という言葉も解釈の中に入ってきます。美観をさらに掘り下げると、「訪れて良し」、「住んで良し」というような外と内の視点が出てきます。着眼点と基本理念がうまく連携できるようなキーワードは何なのかを考える必要があります。「きれいな奈良県」が今ひとつ消化しきれていない印象を受けました。

久部会長：解説文を丁寧に書く必要があります。

花田委員：「きれいな」という中には、「外からみてきれい」、「クリーン」、「美観」などということもありますが、その他に「倫理的に美しい」、「そういう暮らし方をしていこう」ということが入っているのかなと思います。端正とか品格とか「奈良らしい」ということを表現するとなると、「やまとしうるわし」が良いのかなと思います。「きれい」という形容詞は一般的過ぎて、平たく感じてしまいますが、外から見た感じだけでなく、暮らしている本人がどう考えていくか、という倫理的な観点も「きれい」には入っているのかなと思いました。「住みたい」、「訪れたい」についてですが、「奈良県に住みたい」、「奈良県を訪れたい」と県外の方々が思うような奈良に住んでいる、そのように県民が思えることで誇りに繋がるという意味だと思いました。「住みたい」、「訪れたい」というのは、外からの評価を高めて、中で住んでいる人が誇りを持てるようにということを狙っているのだと思います。

久部会長：「住みたい」というのは「外からみて住みたい」のであって「住み続けたい」ではない。尼崎市長が言っていたことですが、尼崎は「住みたい街」ではなく、「住んで良かった街」であるとのこと。関東の人は尼崎に対してあまりいいイメージをもっていません。しかし、関東からの転勤者の方は「住んでみたらいい街だった」とおっしゃる。尼崎は「今度転勤するなら是非とも住みたい」と思えるような街であると市長はおっしゃっていました。だったらもっとPRして「住みたくなる街」にしていこうじゃないかという動きが出てきています。住んで良かった、住み続けたい、住みたいはニュアンスが違うと思います。このあたりを上手く使い分けていく必要があります。

阪元委員：着眼点ですが、地方創生に関して2つ目と4つ目は同じレベルの問題です。ロジックの組み立てとして、1番目はコンセプトの話。あとの3つはポリシー、政策です。その辺を上手い具合に整理したほうがわかりやすいと思います。語句を定義し直す必要があります。特に4番目の地域力についてですが、環境に関連したキーワードが無いように思います。コンセプトとポリシーとストラテジーという分け方でロジックをもう少しきれいに整理し、また、語句の定義をし直した方が良いと思います。重なっている要素が多くてわかりづらいです。その辺を上手い具合に整理されてはどうでしょうか。

久部会長：4番目の着眼点には色々なものを詰め込みすぎているような気がします。もう少し分解した方がわかりやすいと思います。

梶田次長：着眼点は一例。色々な着眼点があるので、今日いただいた様々な意見を織り込み、そこからロジック化していきたいと思います。2020年に東京オリンピックという日本での大きな出来事があり、いまよりもっときれいな奈良県にしていこうということです。県民の暮らしや価値観も含めて、奈良県というのはきれいになったな、きれいにしようと思っているな、という点について環境計画を通して県民に訴えていけたら良いと考えています。「きれい」にこだわるのであれば、「きれいな奈良県」の定義付けが重要で、そこをしっかりとしないと県民に理解してもらえません。そこは努力して考えていきたいと思います。

楠下委員：奈良の印象は、落ち着く、ほっとするということが挙げられます。千年来、変わらないというところに品格があるし、安心感があります。そういった日本の原点のところに、皆さんは憧れを持たれています。その前提として「きれい」は最低限必要なことです。ただ現状、奈良公園周辺は非常にすばらしいが、少し街に出ると電信柱はあるし、整備されていないところがまだあります。そういった所を見直して、3年、5年かけて良い街になるように持って行きたいと思います。街路樹ひとつにしても、道路工事で木を切ってしまうと、いまだにきちんと元どおりに植えていないところがあります。また、観光客がバスで通られた際、奈良公園と比較して周りの道路には緑が少ないという印象を持たれていると思います。こういうことも含めて、きれいな街にはどういう条件が必要かということこれから整理していく必要があります。地方創生ですが、観光で来られた方が宿泊されて、ゆっくり楽しんで帰っていただくという点でも地方創生につながる要素は多分にあると思います。奈良でゆっくりと泊まっていただけるような施設などを整備して、ゆっくり安心して楽しんでいただけるというような街づくりにもっていけば、地方創生につながるのではないのでしょうか。そうなれば、住みたいと思ってもらえるようになると思います。歴史があり、街もきれいで住みたいな、というコンセプトを是非入れてもらいたいです。

久部会長：まだまだ意見はあるかと思いますが、まだたたき台の段階ですので今後も議論を続けていただければと思います。では、資料1(3)～(5)に関してまとめて議論していただきたい。今後の計画の見直しにおいて、こういう観点が必要ではないかなど、自由に議論していただければ良いかと思いますがいかがでしょうか。

花田委員：(5)の施策・事業体系について。最近、自然災害が頻発しており、奈良県でも随分被害が出ています。そういったことを考えると、防災に関する柱をいれても良いのではないのでしょうか。低炭素に関してですが、IPCC（気候変動に関する政府間パネル）では今まで緩和策が強調されてきましたが、これだけ温暖化が進んでしまうと適

応策が不可欠となってくるので、その辺りのことも盛り込んでいただければと思います。循環型では2Rを強調してはどうでしょうか。出てしまったものをリサイクルするのは遅いので、例えばグリーン購入等を強く打ち出してはどうでしょうか。県では奈良モデルのスキームがあります。奈良には色々な場所があり、資源も色々あります。こういったマーケットを通じて、北部や南部が一緒になって、県が持っている奈良らしさや奈良の資源を活用していけるような取組が進めば良いと思います。そういうことは奈良全体を見なければできません。また、市町村の協力も欠かせません。これらを踏まえると奈良モデルにつながっていくのではないかと思います。こういった事を考えて計画の策定に当たっていただきたいと思います。

久部会長：奈良だからこそ「ストック活用型」を強く押し出していけるのではないのでしょうか。歴史的資源、自然的資源等をうまく有効活用しながら、未来志向の環境作りを進めていくのも一つの手だと思います。

佐藤委員：「訪れてみたい」が重要なキーワードとして考えられます。観光客の2割だけしか奈良に宿泊されません。他は大阪などで宿泊されます。魅力が無いのか、「奈良らしい」というものが無いからなのか、その辺はわかりませんが、歴史文化の開拓を景観の視点から取り組んではどうでしょうか。近年、山の辺の道周辺の景観が損なわれつつあります。景観条例や地域の連携などを通じて、出来るだけ早い段階で景観が損なわれないような配慮が必要です。清流の保全についてですが、紀の川と吉野川の使い方方を明確にして、奈良県では吉野川を多用すべきだと思います。大和川のBODが3.5mg/L以下で減少傾向であり、高度成長前の水準に戻っています。このことから、県民が大和川と親しめるような環境づくりが必要であり、計画の中に具体的な方針が盛り込まれれば良いと考えます。

久部会長：景観づくりについては規制をかけることも一つ。また、「美しい奈良」を県民運動として盛り上げていくことが重要となってきます。大阪で世界遺産の登録がなされていない原因として、市民運動になり得ていないということが挙げられます。いまだに行政が旗降りをしていて、地域が世界遺産登録を渴望するという段階にまで成熟していません。奈良に住むことの誇りが根付いてくると、奈良らしいライフスタイルが構築され、自ずと奈良らしい景観も生まれてくる、そういったストーリーが欲しいと思います。

中澤委員：「官民オール奈良」の取組が挙げられていますが、その割には県民一人一人が実行するというイメージがありません。県が一生懸命にやるというのは感じられますが、実際に住んでいる県民がその活動に参加していくというイメージが湧かない。県民運

動が継続して展開されることで「住みたい奈良県」が実現されれば、環境総合計画は奈良を変えていける大きな力になると思います。奈良の良さを県民が体感できるような、協働的な取組が盛り込まれれば良いと考えます。

久部会長：そのようなことが新しい計画での「人づくり、地域づくり」の分野に重点的に盛り込まれたら良いと考えます。また、主要プロジェクトにある「きれいに暮らす奈良県スタイル」の推進が、「奈良らしいライフスタイルをみんなで展開しよう」ということにつながると思います。この点でも知恵を絞っていただければ良いと思います。

遊津委員：温暖化問題については、エネルギー問題、防災問題、適応策に関する観点が不可欠です。奈良は森林が多いので、カーボンオフセットなど、森林吸収源について強調すべきだと思います。奈良のCO<sub>2</sub>削減については、交通問題が大きな観点の一つ。これからは適応策への対応も必要です。また、奈良の場合、家庭やオフィスからのCO<sub>2</sub>削減に向けた取組も重要なポイントとして押さえておくべきところです。

計画は策定後にいかに推進していくかが重要です。大抵、計画は作るまではいいがフィードバックがされていません。フィードバックについては、市民の力も活用する必要もあると思われます。

ようやく観光よりも環境が出てきたように思います。「観光のベースは環境」と考えており、計画のなかでもそういった観点が出てきています。そのような点を次期計画でもクローズアップして、市民の力も活用しながら推進してもらいたいと思います。

花田委員：大和川の件について。淀川でイタセンパラが見つかり、環境大臣賞が贈られました。大和川で奈良の象徴的な生物があったら（例えば多摩川での鮭の放流のような）、大和川をアピールできるような生物があったら教えて欲しいです。

柘田委員：大和川の清流復活では、「蛍が舞って鮎が泳ぐ」というようなことが思い浮かびます。鮎については今も遡上しているということも耳にしていますが、メルクマールとして何があるのかを調べてみます。

久部会長：メルクマールというよりも、シンボリックな生物があって、それを守るという掛け声で色々な運動が繋がっていけると良いということです。レッドデータブックの生物でなくても良いと思います。これだったら県民が納得して、これを守るためにがんばれるという生物がいないかということです。

佐藤委員：私はレッドデータブックの改訂に、サンショウウオを専門として参画しました。

象徴的な、看板となるような、普遍的な、県民が納得できるような生物は抽出しづら  
いと思います。レッドデータブックの生物から選ぶのというのも無理があるような気が  
します。

久部会長：大阪千里ニュータウンや泉北ニュータウンでヤマザキソウが見つかっています。  
郊外住宅地の象徴的植物として宣伝していこうと吹田市民の方がおっしゃっていま  
した。みんなが「なるほど」と思えるようなストーリーをつくっていくことが必要だ  
と思います。

藤井委員：清流の保全の評価のところで、環境基準点の達成状況が気になります。  
大和川のBODは3mg/Lまで下がってきています。実際に清流復活という話になっ  
た場合、BOD値などの水質をどこまでもっていけば良いのかという考え方が必要で  
す。類型指定が上がっていくと達成状況も厳しくなり、低く評価されてしまうことが  
あります。このあたりの着眼点をもう少し検討すべきだと思います。大和川の下流域  
ではCODは高い水準で横ばい状況にあります。生物易分解性と生物難分解性の有機  
物量が変わってきていますし、水質総量規制にも関わってきます。県としてどうして  
いくのかを考えてもらいたいと思います。

久部会長：清流の復活の「清流」とはどういうイメージなのか、「奈良県スタイル」とはどう  
いうことかを説明できるようにしなければいけないと思います。

藤井委員：清流とは、単にきれいにすれば良いということだけでなく、生物多様性とも関連して  
います。どの生物がこういった場所に対応できるのかということの整理も必要です。

佐藤委員：川の清掃と蛍の観察をNPO団体とともに継続的に実施しています。蛍の数と川に生  
息する蛍の餌の量との間には、ある程度関連性があることが我々の市民活動の中でわ  
かってきました。天理市庁舎横を流れる布留川でも数百匹の蛍が見られるようになって  
きました。「水清ければ魚棲まず」ではないが、川にある程度、餌となるものがな  
ければいけません。生物多様性や象徴的な生物を考えていく中で、ゲンジボタルを検  
討してみるのも良いのではないかと思います。

遊津委員：生物多様性に関してですが、現在、私は春日山原始林の再生に携わっています。  
鹿による害が見られています。前回の計画では、生物多様性が後で追加されたかと思  
います。計画で生物多様性を取り上げるとなると、春日山原始林は外せません。た  
だ、春日山原始林に関して、その特徴や生物多様性において、他の原始林と大きな違



いが無いということがあり、生物多様性のなかで春日山原始林についてどこまで言及すべきなのか、ということも出てきます。

佐藤委員：防災の視点や森林による CO<sub>2</sub> 吸収と関連するが、防災林や防火林という視点も必要だと思えます。植林地については、吸収される CO<sub>2</sub> よりも呼吸によって排出される CO<sub>2</sub> の量が上回っているというような地域も出てきています。間伐を進めるのも良いことですが、外国の観光客が「緑がそれほど多くない」という印象を受けていることを考えると、積極的に防災・防火・CO<sub>2</sub> 吸収・景観といった面での配慮が必要であると思えます。また、景観を損ねる建物をうまく隠すことの出来るような植栽の仕方を考えるなど、計画的な植栽を進めていくことが必要です。「なら四季彩りの庭づくり」ということで植栽計画が出されていますが、単なる庭、ガーデンというような人間が管理する緑の空間だけではなく、自然の生態系を活かすという視点をも踏まえた植栽を考えてはどうでしょうか。

久部会長：奈良や京都が華やかな都だったころ、周辺の環境を酷く痛めつけてきました。周りの山がはげ山状態ということがかなりありました。数百年間を通してそれを再生させてきました。我々はそこから学ぶべき事をしっかりと学んで、二度とそういうことはしないという心構えが必要です。

井原委員：緑をもっと増やすことに異論はありません。一点、気になるのが管理の問題です。人工的な管理だけでなく、森林だったら森林に適した管理、その場合だと人との共生がどうあるべきかということになります。近年様々なレベルでの管理が行き届かなくなっています。緑に焦点を当てると、緑と人との関わり方が見えなくなっているため、管理が行き届かなくなっています。管理を適正にするということはどういうことなのかを住民との間で長く地道に調整していくべきだと思います。長期的なスパンで地道に一人一人が考えていくという取組を底上げしながら、且つ、続けられる仕組み作りをしっかりと考えていく必要があります。基本目標 1 の景観の創造や基本目標 2 の清流の復活と保全に関係していると思えますが、維持管理に着眼点において、官民連携あるいは民主体による管理体制の構築を総合計画で書き込んで行く必要があります。

柘田次長：環境総合計画でどこまで関与できるかということであり、チャレンジしていきたいと考えています。道路や街路樹の整備については関係セクションが環境を意識してやっています。したがって環境総合計画には、ご指摘のあった点については要素として盛り込まれています。ファシリティーマネジメントや維持管理も視野に入れつつ、環境

総合計画がどこまで言及できるのかということだと思います。今までの計画を踏まえて、次期計画において皆様の意見をどうまとめ上げていけるのかということにチャレンジしてみたいと考えています。

久部会長：前回の見直し時でも述べましたが、環境への配慮が生活に組み込まれていくというのが最も無理のない維持管理になります。里山が守られていく、棚田が作られていくというのは、昔の人が景観や環境に配慮した結果ではありません。一番効率的な工事をやり、生活することで必然的に環境が守られていました。その縁を切って、別の所で生活することによって、「環境保全」、「景観保全」が叫ばれるようになりました。私達の暮らしの中に、いかにして環境配慮を組み込んでいくのか。その先に「美しい暮らし」があるということだと思います。そのようなストーリーが上手く組み合わせられていけば、井原先生の維持管理の観点も計画に組み込んでいけるのではないかと思います。

楠下委員：奈良県の南半分は森林地帯であるが、現在、薪を使用している人が少ない。生活スタイルが変わってきています。身近にある薪を使えば良いのではないかと思います。設備自体が変わってしまっています。身近なものを使うような生活スタイルに、ある程度変えていく必要があると思います。そうすれば里山保全にもつながるし、生物多様性にもつながります。街と山村の交流も進めていけば良いと思います。県の総合計画が県民フォーラムなど様々な団体で活用されているが、各団体の活動が計画のどの部分と関わっているのかが分かるように工夫されれば、奈良県の中でどのような活動をして、またどの団体等と協力してやれば上手く活動できるのかがわかり、効果的な取組ができると考えます。

阪元委員：低炭素社会についてですが、先程から防災という観点が出ています。災害が起きた時にどうするかという街づくりが重要です。その中で、災害に強い再生可能エネルギーの活用が欠かせません。これは、新しい計画の柱である暮らしの安全安心に繋がってくると思います。また、地域づくりの促進にも関わってきます。これらの観点ももう少し盛り込まれれば良いと考えます。地域づくりに関してですが、街全体のエネルギーインフラが省エネになるような視点が必要です。奈良モデルというキーワードがありましたが、県と市町村がうまく連携して取組む、そういった要素が計画の中に組み込まれていけば良いと思います。災害に強いエネルギーインフラが整備されることによって、暮らしの安全安心につながるという観点が組み込まれていけば良いと思います。

吉田委員：東吉野村で 100 年前の発電設備を動かすという動きがあり、奈良コープも支援しているところです。山村地域では、エネルギーまでも自給自足しており、みんなが生活していました。しかし、時代の流れに応じて発電所が閉鎖され、街と同じような電力を使用するようになりました。現在になってエネルギーのことを考えるようになり、発電所が復活し電力の自給自足に向けて走り出しました。同じ奈良でも市街地と山間部では色々な面で違いがあるため、同じような事を目指して同じようなことをやっていくことはできません。山間地では意識しなくても水を大切にするという意識が根付いており、エネルギーも自分たちで何とかしようという気持ちがあります。市街地に暮らす人たちはそういったことを知っておく必要があります。また、生活の中で木を使わなくなることで、山間部において林業の仕事がなくなり、人が居なくなり、空き屋が増え、結果として森林が手入れされずに荒れています。

久部会長：「東吉野村のような事例を集めて大々的に PR し、それによって共感者が増え、ライフスタイルの転換が図られる」、というような観点が計画に組み込まれれば良いと思います。辛い思いをするというのが今までの環境計画では多く見られていました。もっと「おしゃれ」だとか「かっこいい」とかそんなキーワードがあっても良いのではないのでしょうか。

久部会長：今日は色々なアイデアや知恵をいただくことができました。上手く吸収して計画の素案に反映していただきたいと思います。

以上